

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集

館林市埋蔵文化財分布調査報告書（1）

BUNPU - CHOSA

1983

館林市教育委員会

はじめに

館林市教育委員会

教育長 堀 越 亘

人間の生活は、この大地に、かって人々が「棲み」ついた時から今日まで、連続として続いております。

それは、大地という一つのフィールドを媒介として現在の私達と強く結びついています。

この大地を横に広がる空間としてとらえるならば、連綿と続く縦の軸は時間として考えることができます。

空間と時間のつながりは、未来に向けても同様です。これを私達は歴史と呼んで良いのではないでしょうか。

歴史において、その触媒が限りある大地であるならば、限りあるフィールドに残された過去の生活痕跡は、新しい時代に同化されてしまってもしかたないかもしれません。新しい時代に、その理念と精神が受け継がれれば、良いのではないでしょうか。

歴史をよく「過去」「現在」「未来」の3方向から考えます。

過去から未来へ向けての絶大なる信託を受けてある現在の私達は、その信託を、ただノスターからくる感傷として受けとてはなりません。その1つ1つを確実に、かつ正確にそしゅくして、初めて未来に受継げるのではないかでしょうか。

今回の分布調査は、そんなことから、現在のフィールドに残された生活痕跡を、より多く、より正確に、把握するとともに、そこにつづられたメッセージを、より多く未来に向けて受け継いで行くことを目的に、実施したものであり、この結果を読むことで、今後の埋蔵文化財の保護、保存、管理の方法の基本を考えようというものであります。

調査にあたり、私達の意図を理解していただき心よく御協力、御指導下さいました皆様方に深く御礼申し上げます。

昭和59年3月31日

例　　言

1. 本報告書は、館林市内の分布調査の第1年次の調査結果をまとめた調査報告書である。
2. 本年度の分布調査は、三年計画の第1年次にあたり、市内の東南部を中心に実施したものである。
3. 本分布調査の主体は、館林市教育委員会であり、その組織は次の通りである。

教育長 福田 郁司（58年11月まで）

　　〃 梶 越 亘（58年12月より）

教育次長 島田 勇吉

事務局 館林市教育委員会 文化振興課 文化財保護係

課長 錦田 正弘（58年6月まで）

　　〃 森田 茂（58年7月より）

係長 三田 正信

社教主事 落合 敏男

学芸員 岡屋 英治（担当）

主事 石井 洋史

作業員（調査・整理） 藤坂和延、恩田英男、越谷長男、守田国雄、葭葉嘉亮、
葭葉たか、坂村昇一、坂村フジ、荻原毅、川島考夫、
星松宏、高橋智子

4. 調査の期間は、58年4月～59年3月までである。
5. 調査に伴う諸費用は、国・県補助により館林市が負担した。
6. 本報告書の図面作成・トレイスは、岡屋、藤坂が行い、写真撮影・文書・編集は三田、岡里、藤坂が行った。
7. 本報告書中、必要な部分にはトーンを使用した。
8. 調査にあたり、踏査の指導者として、の方々に協力をお願いした。感謝いたします。

藤巻幸男、小島教子、飯田陽一、徳江秀夫、大木紳一郎、原雅信、石坂茂、岩崎泰一

本文目次

| | |
|--------------|----|
| はじめに | 1 |
| 例　　言 | 2 |
| 本文目次 | 3 |
| 図版目次 | 4 |
| 第Ⅰ章　調査の目的 | 5 |
| 第Ⅱ章　調査の方法と経過 | 6 |
| 第Ⅲ章　館林の環境 | 12 |
| 第1節 地理的環境 | 12 |
| 第2節 歴史的環境 | 15 |
| 第Ⅳ章　調査の内容 | 19 |
| 第1節 那谷地区 | 19 |
| 第2節 赤羽地区 | 22 |
| 第3節 六郷地区 | 26 |
| 第Ⅴ章　まとめにかえて | 30 |

図 版 目 次

| | |
|-----------------------------------|---------|
| 第 1 図 館林の現況 | 7 ~ 8 |
| 第 2 図 調査実施地区 | 9 ~ 10 |
| 第 3 図 館林の地勢図 | 13 ~ 14 |
| 第 4 図 市内遺跡分布図 | 17 ~ 18 |
| 第 5 図 郷谷地区の地形と遺物分布図 | 20 |
| 第 6 図 赤羽地区の地形と遺物分布図(1) | 23 |
| 第 7 図 赤羽地区の地形と遺物分布図(2) | 24 |
| 第 8 図 六郷地区(東南部)の地形と遺物分布図(1) | 27 |
| 第 9 図 六郷地区(東南部)の地形と遺物分布図(2) | 28 |

写 真 目 次

| | |
|-----------------------------|----|
| 写真 1 調査風景 | 6 |
| 写真 2 館林を代表する景観(池沼と台地) | 12 |
| 写真 3 郷谷地区の景観 | 19 |
| 写真 4 赤羽地区の景観 | 22 |
| 写真 5 六郷地区の景観 | 26 |

第一章 調査の目的

本市は、群馬県の東端に位置する中核都市であり、利根・渡良瀬川という両大河の影響をうけた低台地と沖積低地から成りたつ地域である。

水辺の低台地としてあったこの台地は、水の確保できる場所として、古くから生活の場として活用されつづけている。

そしてそれは、今まで連続としてつづいている。

近年は、土地の再開発がさかんであり、これら過去の人々の生活の跡は、新しい人々の生活の場として生まれかわるようになり、その痕跡は徐々に失われつつある。

こういった現象は、人々の生活の場が、同一フィールド上で行なわれるかぎり、しかたのないことと言うことができよう。

本市における埋蔵文化財包蔵地に対する基本的な調査は、昭和46年に群馬県遺跡地図作成時に実施されたままで、その後環境変化に対する追調査は、なされていない現状にある。又、開発事業との調整の基本となり、文化財保護の一つの基礎ともなる遺跡台帳についても同様である。

こうしたことから、現状においては、すでに破壊されてしまった包蔵地があったり、未周知の包蔵地が工事中に発見されるなど、台帳自体にもズレがあり、包蔵地の管理や、開発行為との調整において支障が表面化しつつある。

このような理由から、埋蔵文化財の包蔵地に対し、精度の高い分布調査を実施するものとし台帳の整備をはかると共に、今後の埋蔵文化財の保護保存計画を策定することを前提として本年度から3ヶ年、調査を実施することとした。

又、今回の調査にあたり、この分布調査が、ただ単に、遺跡の存否という問題だけでなく、一つの地域における特色といったものを考える時の素材となる調査を行うこと、過去から未来へ向って託された人間生活に対する現地点での記録となりえることを、一つの目的とした。

第Ⅱ章 調査の方法と経過

今回の分布調査は、前述の通り、ただ単に遺跡の分布地図を作ることのみでなく、今後の埋蔵文化財の包蔵地に対する保護・保存・管理へむけての基本計画を策定することを目的として実施したものである。

調査は、市内を3ヶ所にわけ、3年間で網羅するものとして3年継続の事業とした。

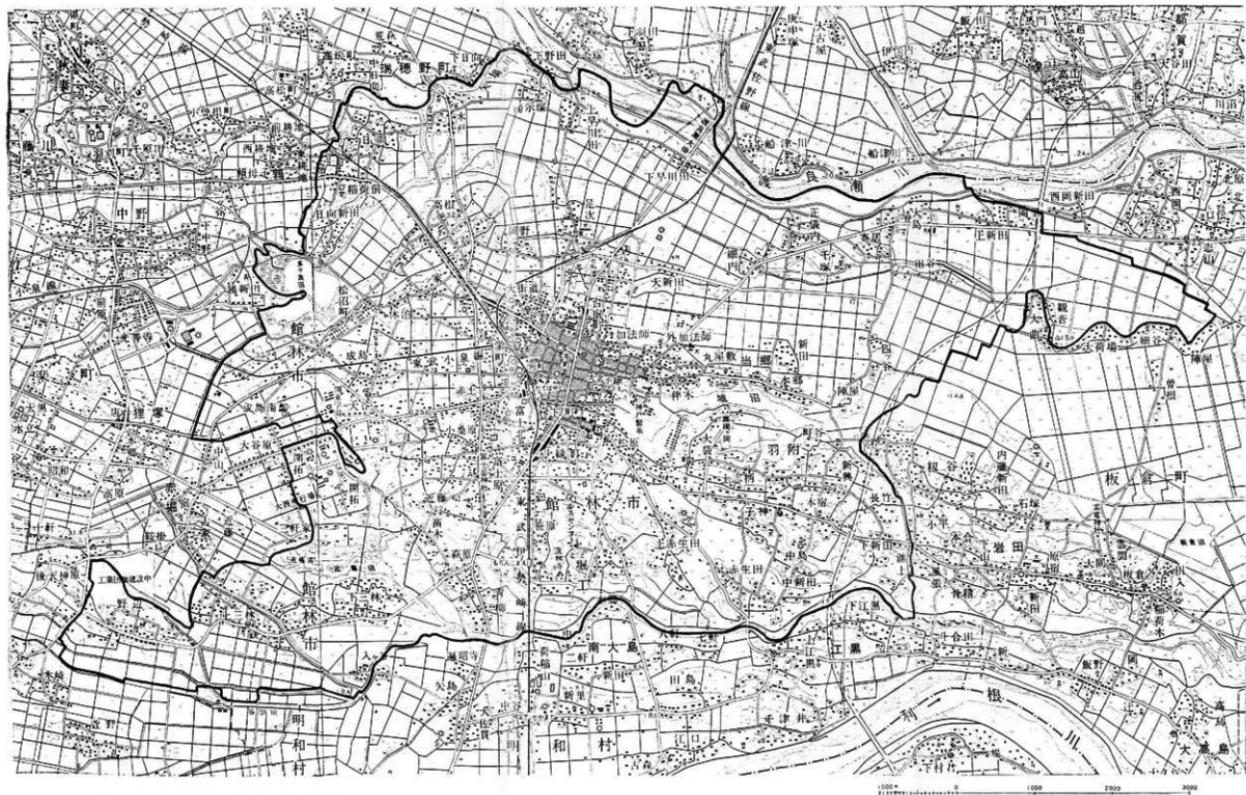
調査地区は、旧地区別に、第1年次（昭和58年度）赤羽地区・大島地区・郷谷地区を、第2年次（昭和59年度）六郷地区・三野谷地区を、第3年次（昭和60年度）旧箭林地区・多々良地区渡瀬地区をその対称とし、各年度毎に、踏査の結果をまとめ、台帳の整備をはかるとともに、最終年度に遺跡分布地図の作成・保護・保存・管理計画の策定を実施するものとした。

調査方法については、ただ単に遺物の存否、遺跡の存否のみを確認するだけでなく、地形図をもとに、地形の確認、地形変化の確認、微地形の確認を行いつつ、遺物の分布状況を確認し、又、遺物の時期もその都度記録していく方法をとった。また、土地利用者等に、耕作時の状況や、土地改良の状況等を聞き作図の参考とした。

遺物・地形のマッピングには、2500分の1の都市計画図（昭和46年当時の遺跡を書き込んだもの）を使用し、現地で作図するように心がけ、各地点での調査終了後に、整理するよう心がけた。

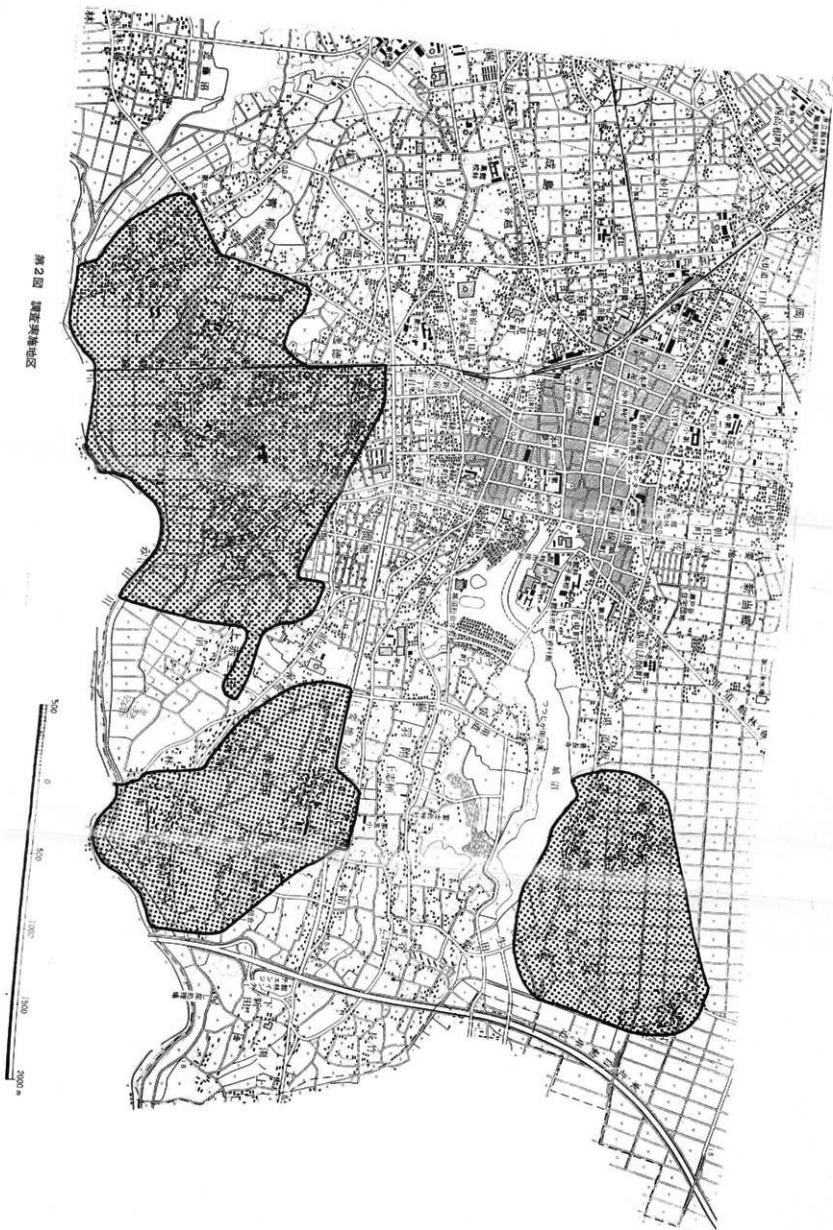


写真1 調査風景



第1図 館林の現況

第2図 調査実施地区



本年度は、第1年次にあたるため、調査地区を赤羽・大島・郷谷地区としたが、実際歩いてみると、谷地が、台地深くまで入り込んだり、土地改良によって地形復元が困難であったり、実際に考えたより調査範囲が広かったりで、対称地区の一部の調査にとどまった。

又、赤羽地区では、台地のつながり、遺跡のつながり等から、六郷地区の東南部までくい込んでしまった。

調査区域を第2図に示したが、それぞれの地区の小字名で上げるならば、

郷谷地区

本郷・瀬戸・丸屋敷の一部・道神塚の一部・新田・道祖神・五反田の一部・陣谷（赤羽分）

村東・鎌本の一部・村前・神谷・焼石の一部

赤羽地区

山田の一部・獅子垣・中新田・待辺・寺浦・中島・志柄・子ノ神・久保・大林（以上東南部）

山東・新田・皂角子・館道・間堀・上の前の一部・蛇沼（以上蛇沼周辺）

六郷地区

小桑原間堀・道堀・大原道東・大原・能ノ浦・唯戸沼・出戸・道満・美園町・三反田（以上蛇沼～茂林寺沼）

道堀・法正谷・寺前（以上茂林寺沼）

逸徳・笹原・間ノ谷・中山東・出戸・中根・宮田・遠山（以上茂林寺沼西側）

萩原・十王・堀ノ内・前通・鹿島道北・能野・鹿島道南（以上東沼西岸）

以上である。

なお各部分は、台地及び池沼によって区切られており、台地にそっての調査を行ったため、小字全域の調査となっていない部分もある。

調査にあたっては、2～3人のグループを構成し、地形図をたよりに、台地にそって歩くものとし、調査の必要から、可能なかぎり、指導者がつくこととした。

本年度の予定からいくと、全域をカバーできたわけではないため、今後、59年度・60年度で未調査部分をおぎなっていく予定である。

第Ⅲ章 館林の環境

第1節 地理的環境



写真2 館林を代表する景観（池沼と台地）

館林市は、関東地方のほぼ中央部に位置する市である。

羽をひらげた鶴の形を群馬県にたとえるなら、そのちょうど頭の部分に相当する。群馬県の東端にあたる本市は、北を渡良瀬川を境に栃木県と、南は谷田川をへだて群馬県明和村・千代田町、東は、群馬県板倉町と、西は、旧利根川と考えられる溝地帯をへだて群馬県邑楽町と接する。

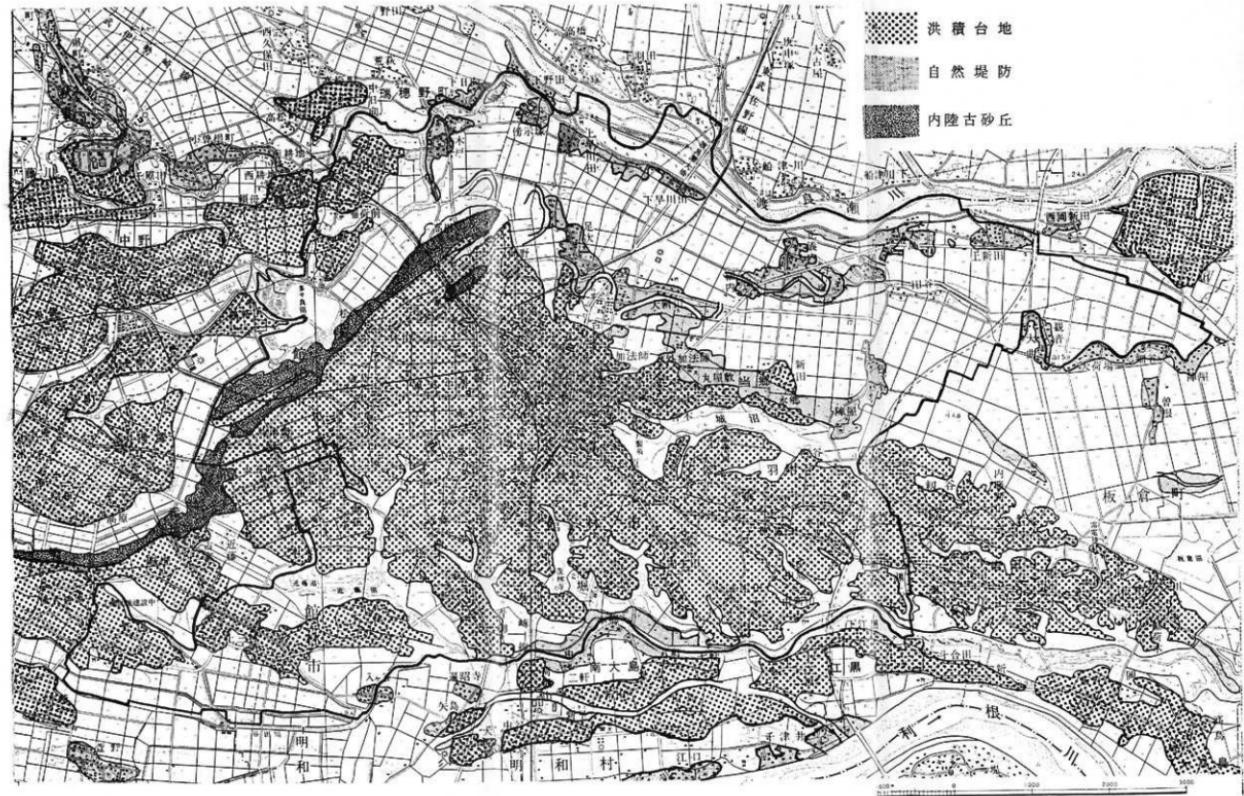
本市は、北に渡良瀬川、南に利根川といった関東地方一・二の大河にはさまれ、その地形はこの両河川が造り上げたといっても過言ではなかろう。

標高は、最も高い高根付近で33m、低い地域で16mを計り、内陸部にあっては比較的低い平坦な地域であるといえよう。

第3図に、本市を含めた周辺地域の地勢図を上げた。

これをみると、本市は、大きく低台地と、沖積平野に分けることが可能で、山地0といった特色ある地域であることがわかる。

台地は、「邑楽・館林台地」と呼ばれるもので、標高16m～25m程の低台地であり、東にむ



第3図 錦林の地勢図

かってゆるやかに傾斜している。

この台地は、砂や粘土の上に中部・上部ローム層をのせ、その堆積時は、下末吉海進時までさかのぼるといわれている。台地の西側にそうように、千代田町古海より、頃林市高根まで連なる砂丘帯が存在している。

台地を取り囲むように沖積低地が存在する。この沖積地は、利根・渡良瀬の大河をはじめとし、矢場川・谷田川といった小河川によって形成されたものと考えられるが、矢場川・谷田川は、その流域や、沖積地内に数多くの自然堤防を形成していることから、比較的新しい時期の河川と考えられている。

又この沖積地には、多々良沼・城沼・近藤沼・茂林寺沼といった池沼や、数多くの谷地が存在し、本地域の景観を趣き深いものとしている。

これらの沼や谷地は、台地の奥深くまで入り込んでおり、人間生活の環境を形成すると同時に、行動を制限している。

今回の調査では、この地形が、遺跡の分布とどのように係っているのかを調査することも、1つの目的となっており、茂林寺沼でのボーリング結果等をも加味しながら、分析していく予定である。

第2節 歴史的環境

本市の歴史的環境についてまとめてみたい。なお今回の調査における遺跡分布にあっては、まだその全容がとらえられていないため、今回は、昭和46年度当初の遺跡分布図をもととする。

昭和46年時に確認された遺跡は、46ヶ所である。

そのほとんどが縄文時代のものといえる。これらの遺跡は、時代的に、又、地形的に、いくつかの特徴をみせている。

この特徴を上げてみると、全体的にみた場合、そのいずれもが、台地と沖積地との接点に存在している。

また、その分布をみると、池沼や、河川によっていくつかのまとまりが考えられる。

城沼周辺には、当郷遺跡・下志柄遺跡・花山東遺跡・大袋Ⅰ遺跡・大袋Ⅱ遺跡・三軒屋遺跡屋敷派遺跡・善長寺付近遺跡・町谷古墳・富士山古墳・山王山古墳の11遺跡が上げられている。

これらの遺跡は、縄文時代の比較的早い時期（早期～中期）の遺物を出す。前期については、比較的大きな遺跡が存在したであろう地域である。又、古墳が多いのも特徴として上げられよう。上記3古墳の他に、山王山古墳の周辺には、一の山・二の山といわれる古墳が存在したといわれている。

旧矢場川周辺、旧矢場川とは、台地の北縁にそって逆行する旧河道や、自然堤防が確認され

るため、現状では河川が確認できないが、かつて存在していたであろう流路である。

これにそっては、加法師遺跡・外加法師遺跡・岡遺跡・岡野遺跡・星敷前遺跡・八方遺跡・朝日町遺跡・大街道遺跡・愛宕神社古墳が上げられる。

これらの遺跡では、縄文中期の遺物を出すものが多い。又、古墳時代の集落を予想させる遺跡が存在する。

茂林寺沼・蛇沼周辺、ここには、縄文時代中期～後期にかけての大規模な遺跡が多く、この時点では、縄文時代に限られている。腰巻遺跡・笹原遺跡・下堀工道溝遺跡・大原道東遺跡・間堀遺跡が上げられる。

近藤沼周辺・近藤岸子遺跡・伝右衛門遺跡・北小袋遺跡・苗木遺跡・北近藤第1地点遺跡・同第2地点遺跡・富士獄神社古墳・がこの周辺の遺跡として上げられる。

近藤沼をとりまく遺跡は、古墳時代の遺跡が多いといえよう。また、この周辺には、かって古墳が多く存在したとも言われている。

多々良沼周辺（内陸古砂丘上）、水溜第一地点遺跡・同第二地点遺跡・上洞屋遺跡・山神脇遺跡・高根遺跡・外和田遺跡が上げられる。

この地区は、他地域より、一段高い地域（比高3～5m）であり、本市において、最初に入りが住みついた場所と考えられる。

旧石器時代の遺跡が多いのが特徴である。

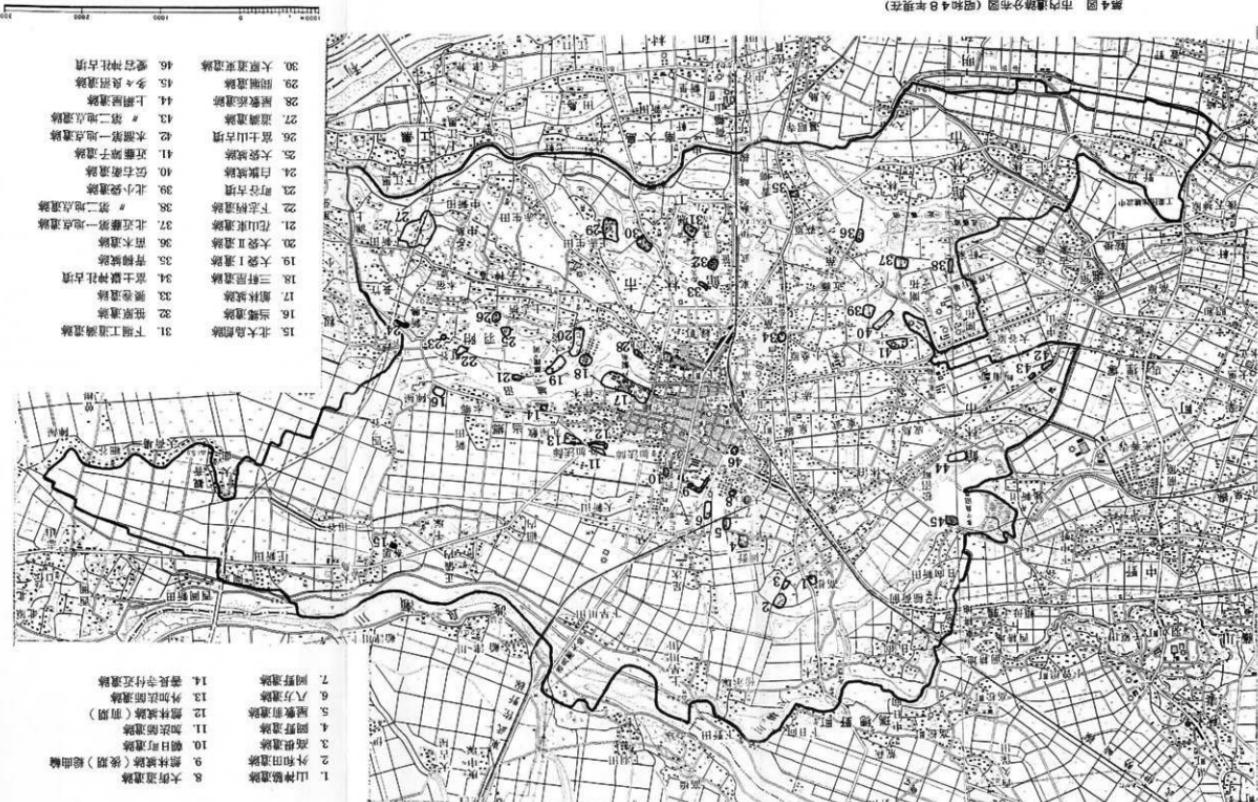
又、高根遺跡を中心として、かっては高根古墳群が形成されていた地域でもあり、この古墳群のいくつかは、現在もなおのこっている。

その他に、台帳には登載されていないが、日向地区にも古墳群が存在したことが、上毛古墳總覧にも見える。現在このうちいくつかが現存している。

以上、昭和48年当時の遺跡台帳を中心に、本市の遺跡分布の特徴を上げて来たが、本年度の分布調査では、この数倍の遺跡が確認されつつあり、又、分布状況も大きくかわってきていている。

今後の調査を通じ、その分布に再度分析を加える必要があろう。

圖4-4 市內道路分佈圖 (昭和4年現在)



第Ⅳ章 調査の内容

第1節 郊谷地区



写真3 郊谷地区的景観

郊谷地区的うち、本年度調査を実施したのは、本郷・瀬戸・丸屋敷の一部・道神塚の一部・新田・道祖神・五反田の一部・陣谷（赤羽分）・村東・鎌木の一部・村前・袖谷・焼石の一部である。

城沼の北岸にある郊谷地区は、大きくみて、洪積台地・自然堤防・沖積低地よりなる。

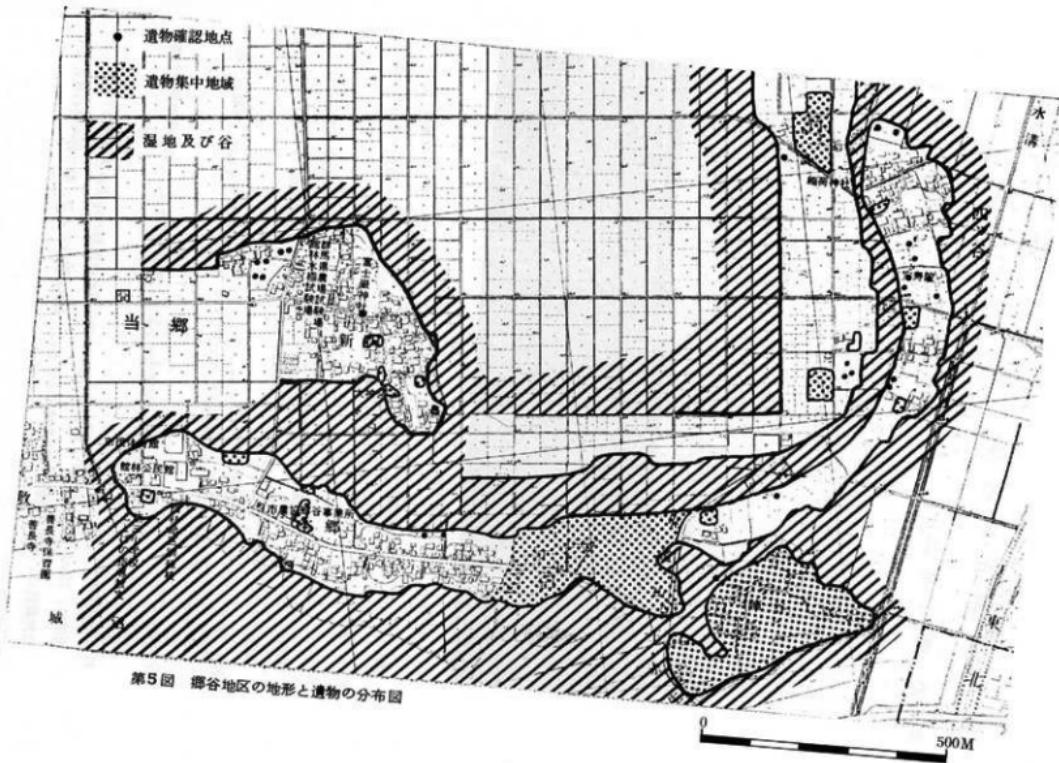
洪積台地は、城沼の北岸にそってあり、水田面からの比高は1mと高くない。標高は、17m前後である。東に向って緩傾斜している。

この台地は、幅45m、300mを測る馬背状の台地である。小字名でいうならば、本郷の大部分がこれにあたる。

また、これに付随するように、島状の洪積台地がある。新田・陣谷は、この島状の洪積台地に広がる集落である。

新田は、75m前後のだ円形の、陣谷は115m×50m程のだ円形の島状の洪積台地である。

自然堤防は、本郷の洪積台地に連続するように、北東に弧状にのび、四ツ谷の焼石付近まで続いている。



この自然堤防は、幅25m前後で、土地改良で、明確にはできないものの、道祖神区域と2本延びるようである。2本の自然堤防をへだてる谷（河道か？）があり幅は10m前後である。

自然堤防と現水田面との比高は、50m前後である。

その他は沖積低地と考えられるが、郷谷地区は比較的早く土地改良が行なわれた地域であるため、高低差が少なくなっている。道祖神・瀬戸の地形復元は難しい。

次に、遺跡・遺物の分布をみてみたい。

昭和48年の遺跡分布地図によると本調査区に所在する遺跡は、当郷遺跡のみである。

遺物の分布状況は、第5図に上げてあるので参考にされたい。

本地域の高台（洪積台地・自然堤防）上は、現在宅地化されている部分が多く、遺物の散布がみられるのは、畑地・陸田部のみである。

しかしながら、この高台には、縁辺部に連続するように奈良・平安時代の遺物の散布が確認される。

袖谷・道祖神には、やや広い範囲で濃い分布がみられる地点が存在する。

又、洪積台地の末端部、本郷の東端、陣谷の部分には、台地全面に広がる形で、鬼高、真々国分の濃い分布が確認されている。

本郷の東端は、現状で当郷遺跡に当たる部分であり、今回の調査においてその範囲が拡大している。

陣谷地区は、現状では、周知の埋蔵文化財包蔵地になっていないが、飯塚多右衛門の表採資料の中に、例がみられる。

この高台は全面で遺物の散布がみられるが、東にむかってやや下くなる状況が確認されている。また、この高台地斜面の畑から、石皿が採取されている。

この地域では前述通り土地改良が大幅に行なわれており、まだ地形復元が完全に行はれていない状況であるが、今後の調査を含めて、精査して行きたい。

第2節 赤羽地区（赤生田）



写真4 赤羽地区（赤生田地区）の景観

赤羽地区的調査は、東南部と、蛇沼東岸の2方面からの調査を行った。

東南部は、山田の一部・獅子垣・中新田・待辺・寺浦・中島・志柄・子ノ神・久保・大林を中心とする区域である。

この区域は、洪積台地を中心とする地域である。館林の台地は、西から東へむけて緩傾斜しているため、この付近は、館林の台地では低い方である。標高20~17mを測り、現水田面からの比高は、1~2m前後である。

本地域には、谷田川からの深い谷が2本確認できる。この谷は、市農協の集配センターの下で一本になる。

北の一本は、農協集配センターから、赤羽中学校の上、子ノ神を通り、谷頭は、主要地方道前橋・古河線をわたり上志柄付近までのびている。谷の幅は25m前後である。

南の一本は、農協集配センター下から、中島・寺浦・久保を通り、谷頭は、山東付近まで確認される谷で、幅25m、長さは430m以上有る。

洪積台地は、この深い谷によって3つに分けられている。

北から、志柄・山田を中心とする台地、子ノ神・中島・獅子垣を中心とする舌状台地、大林・待辺・中新田を中心とする舌状台地の3つである。

志柄・山田を中心とする台地は、東に広がり東北道周辺では、調査が実施されていないため



第6図 赤羽地区の地形と遺物分布図(1)



第7図 赤羽地区の地形と遺物分布図（2）

明確ではないものの、谷にそって平安時代の遺物が散布している。

志柄には、やや広い範囲で3ヶ所の濃い散布地がみられ、山田の日本コイル工業の先端部には、この他に、縄文時代前期(黒浜・関山・浮島式)中期の遺物の濃い地点がある。

子ノ神・中島・獅子垣を中心とする舌状台地は、長さ300m、幅100mを超える大きな舌状台地である。この地域では、比較的小範囲で平安時代の遺物の散布する地点が数多く存在する。子ノ神地区に大きな拠点がある。又、加曾利式のもの、石田川式の遺物も採取されている。

大林・待辺・中新田を中心とする舌状台地は、南を谷田川の冲積地によって区切られる舌状台地である。やはり平安期(国分式)の遺物の散布が多く、集中箇所は少ない。ただ、大林地区に帶状の拠点がある。又、中新田の長良神社そばの道路側面に住居地状の落ち込みが確認されている。

蛇沼東岸は、山東・新田・亘角子・鉢道・間堀・上の前の一部・蛇沼を中心とする地域である。この地域は、蛇沼の谷が大きく入り込んだ地域であり、小規模な舌状台地が多く存在する地域である。

遺物の散布は、間堀地区に諸儀の、黒浜式の遺物が小範囲に、又蛇沼から東に向ってのびる谷にそって、奈良・平安時代の遺物が、広範囲にみられる地域が存在する。

上の前の一部・蛇沼に突出した舌状台地にも、国分式の土器が広範囲にみとめられる地域があるが、これは、現間堀遺跡にあたる。間堀遺跡では、昨年、縄文時代前期黒浜、中期阿玉式の住居が発掘されている。

又、間堀地区、蛇沼北岸にも、国分期の遺物散布がみられ、加曾利E式を伴って、六郷地区小桑原間堀へと広がっている。

以上が、赤羽地区にみられる遺物分布と地形の概観であるが、赤羽地区については、中央部北部の調査が残されている。

この区域においては、奈良・平安時代の遺跡が、帶状に続いていると考えられる。

第3節 六郷地区（東南部）



写真5 六郷地区の景観

六郷地区の調査は、小桑原間堀・道堀・大原道東・大原・能ノ浦・鳴戸沼・出戸・道満・美園町・三反田の蛇沼～茂林寺沼にかけて、逸徳・姫原・間ノ谷・中山東・出戸・中根・宮田・遠山の茂林寺沼西岸・萩原・十王・堀ノ内・前通・鹿島道北・能野・鹿島道南の東沼西岸の3つに分けて考えることができる。

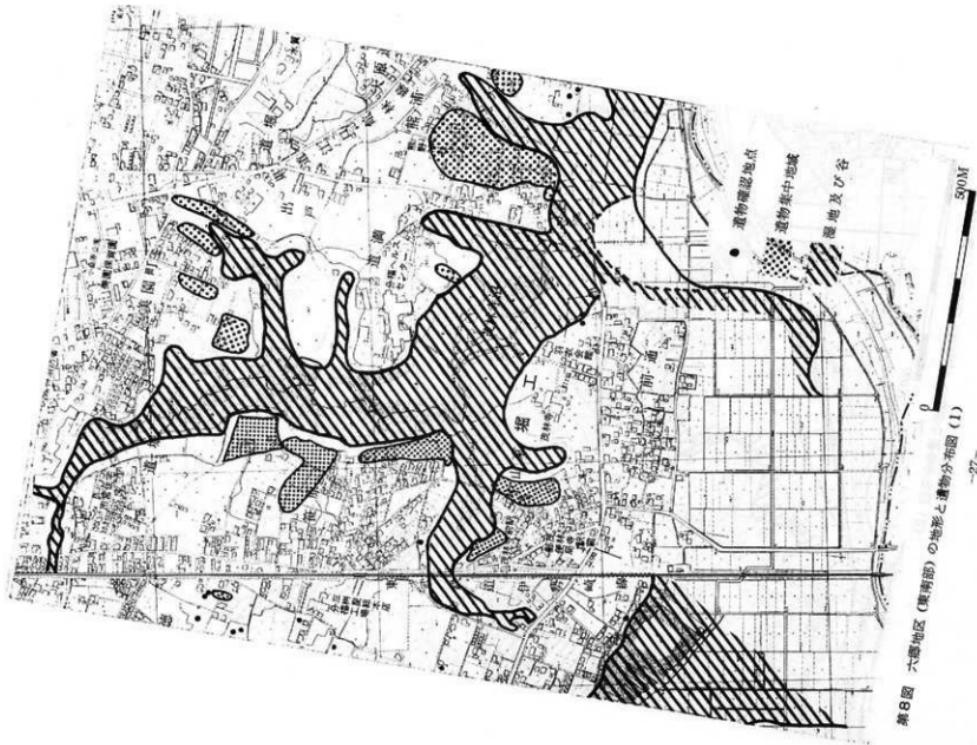
蛇沼～茂林寺沼にかけて、

この区域は、蛇沼と茂林寺沼によってはさまれた洪積台地にあたる。南側は、谷田川の沖積地によって区切られており、大小の支谷が入り込んだ小規模な舌状台地の多い地域である。

蛇沼の谷は、道堀・出戸付近まで入り込んでおり、この北側に加曾利E式を中心とする分布がみられ、広範囲に広がる。しかしこの地域は、東部第二区画整理が終了した地域であり、すでに遺跡の破壊が考えられる。

大原道東では、まだ調査されていないが、繩文後期（堀之内・加曾利B）の分布する地域がみとめられる。蛇沼に西から突出した舌状台地（大原）には、加曾利E式、諸磯b式の遺物の散布がみられる。鳴戸沼には、大きな谷が存在している。この谷に面するように、加曾利E式、称名寺の濃い分布がみられる。

茂林寺沼東岸には、あまり遺物の分布はみとめられていない。これは、この地域が森林部が多いことに原因している。





第9図 六郷地区(東南部)の地形と遺物分布図(2)

美園町で、平安～中世にかけての遺物が薄く散布する地域が確認されている。

茂林寺沼西岸

茂林寺沼西岸から東沼にかけての区域は、洪積台地の広がる地域である。茂林寺沼西岸にそ
って、平安時代の遺物が分布する範囲が多く存在する。笠原・中山東地区に多い。

この二つの地区は、間ノ谷という茂林寺沼からの深い谷がある。

東沼は、現在埋められたれ、現状では住宅地化している。この谷は、深く、出戸の南まで入
り込んでいる。

この沼の東岸の出戸・遠山地区の台地では、遺物の分布は濃くない。

平安時代の遺物が、散在的に採取できる地域である。

東沼西岸

この地域は、東沼と近藤沼に囲まれた地域にある。苗木から延びる大きな舌状台地は、幅140
mをはかる。

今回の調査では、萩原以南での調査であったため、台地全体の遺物の分布は不明であるもの
の、萩原以南では、平安時代の遺物が、台地全域で散在する。

面的にとらえられる部分としては、萩原地区・堀の内地区・能野地区に小範囲でみられる。

第Ⅴ章 まとめにかえて

最後に調査において確認されたことをあげてまとめとしたい。

第Ⅲ章造林の環境の第1節で述べた通り、本市の地形上の特徴を上げるならば、市のほぼ中央部に比高2~5メートルほどの洪積台地があり、その洪積台地を取り巻くように、沖積低地が存在する。

また沖積低地のなかには、旧河川の流路、自然堤防と思われる部分が散在する。

これは、矢場川・谷田川の作用で作られたものと考えられることから、この中小河川は、比較的新しい時代の川ということができよう。

洪積台地の南側は、非常に出入りが多く、これは台地上に降った雨等の浸食によって造りあげられたものと考えができる。

洪積台地と、沖積地の境には、茂林寺沼・蛇沼をはじめとする池沼や、谷地が多く存在するこの池沼や、谷地は、谷頭に形成されたものと考えられる。

本市の土地改良は比較的早い時期（昭和30年代）から行なわれた地域である。このため、地形上の変化が著しい。

特に台地（高台）から沖積地にうつる付近、やや小高い自然堤防付近では、耕作地の拡大が行なわれたためであろうか、明確に地形が復元できない場所も多かった。

また台地上の耕作地は陸田として改良されたところが多く、遺物等の確認に支障をきたした。

次に、現状の遺物分布、遺跡分布からみた特徴を上げてみたい。

昭和48年時の遺跡分布地図と比較してみると、48年次の遺跡と重なる部分が多いが、これは今回の調査では、比較的広範囲に、濃い分布がみられる地域である。

今回の調査で確認されたことをまとめてみると、遺物の分布は、台地上、自然堤防上のいたるところでみられた。

時代的にみると、縄文時代と奈良・平安時代のものがそのほとんどである。

弥生時代のものは現状としては0、古墳時代のものについては、石田川期のものが赤生田で1箇所、鬼高期のものが数ヶ所で確認されたにすぎない。

地形と合わせて遺物分布をみていくならば、縄文時代のものは、舌状台地のほぼ全域にやや濃い分布をみせている。数は、あまり多くなく、昭和48年度確認された遺跡のうちの縄文時代の遺跡のペーセンテージからみると、やや意外な気もする。

奈良・平安時代の遺物は、台地・自然堤防上に、全面的に見られる。その分布状況は、散在的である。

ただ、舌状台地の末端部には、全面的に濃い分布がみられ、大集落の存在が予想される。またこの時期の遺物の分布する地域は、現在の集落の広がる地域と重なる傾向をみせる。縄文時代の遺跡は、現在の集落とはややはなれた場所に所在することから考えて、新しい時代に移るにつれ、集落の集中がみられる傾向を示す。

以上、調査において確認された事項をまとめてみたが、まだ調査が、部分的であり、全体を通しての傾向ではない。

今後他地域の調査を行うことにより、熊林市の遺跡所在の特徴をつかんでいくとともに、今後の埋蔵文化財保護および発掘調査へ向けての指針を明らかにしていくつもりである。

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集

館林市埋蔵文化財分布調査報告書

編集・発行 館林市教育委員会

印 刷 オーラ印刷有限公司

発 行 日 昭和59年3月31日



文化財愛護シンボルマーク

ふるさとの文化と歴史を見なおそう